目次

創刊にあたって　釜屋　修　1
当代農村文学読書札記　青谷　政明　2
——阿Qの影を念頭に——
孔捷生と天安門事件　杉山　菜子　8
柳青とリンゴ　加藤　三由紀　13
——柳青再評価をめぐって——
編輯雑感　釜屋　修　16

創刊にあたって

釜屋　修

超樹理の世界に魅かれた二人の人間の間にかわされた雑談がひとつのキッカケとなり、中国の農民文学を読もうということになった。雑談は日本の農民文学を読んだり、当時の生き証人をたずねようというところまで発展した。1982年の夏から秋にかけてである。1983年春、明確な方針は立てない、少数の悲哀は覚悟、しかしながら連綿と、という思いで"中国農民文学研究会"は発足した。当初から、なんらかの形で記録は残していこうと考えていて、83年夏にその具体化に踏みきることにした。その頃、幸いにも（あるいは一時的現象かもしれないという懸疑をなお残しつつ）メンバーは、例会参加者のべ7人に達した。農村に限定せず、都市文学にも視野を広げようという提案の前に、"農民文学研究会"はもろくもまた勇敢にも数ヶ月にして当代文学研究会へと改称・変身した。会員の中の"農民派"と"都会派"は、それぞれの研究の対象に対する関心の所在を捨てずに、よきセクト主義に立って切磋すること、農村や農民の問題が切り離しがたく都市問題、中国民衆の思想状況と断り結んでいる現状では、研究対象の裾組を都市・農村にわたって拡げておくことの理論的妥当性が十分に認められること、等が、この"もろさ"の背景であった以上、励迎されてしかるべき"もろさ"であろう。

会員個人の研究の立脚点、立場は保証される。当代文学を含め、広く中国文学全般や中国社会にかかわる研究者、学生の参加や提言を重視する。

研究者、学生という枠もまた、われわれの人的接触の現実的範疇という意味以上の制約は不要である。

文革を経て、四人組後の中国の状況をどのように捉えていくか、50年代から60年代前半の文学状況、ひいては日本における現代中国文学研究のあり方についての総括は、現時点ではなお困難ではあるが70年代後半から今日にいたる状況を研究対象として見据えようとする時、後者の研究推進の中で前者の総括を同時進行させなければならないという思いから逃れ出せない。

生産責任制の実施を中心とする農村の新しい変化、都市労働者や知識人・青年が抱えるさまざまな思想状況、文学・芸術と政治・党との関係（ひいては文学者・芸術家の"自由"の問題）、当研究会がこうした山積する問題にどこまで喰いさがれるか、私以外のほとんどの会員の若さを考えてみると、それはそれで私の内部に微かな興奮をもたらしてくれるものである。

（1983．10．24

かまや・おさむ）

当代農村文学読書札記
―阿Qの影を念頭に―

はじめに

生産責任制、解体する人民公社、甦る家族経営――農村は急激に変貌をとげつつある。80年代に入ると、文革の傷痕を訴える文学はトーンダウンし、代って農村生活の変貌を描く作品が増えている。もちろん農村生活（の変貌）を描くことは、何も昨今に始まったことではなく、一貫して中国文学の大きなテーマの一つであったし、これからもそうあり続けるであろう。80年代に入っての特徴は一言でいえば、「生産責任制による」ということであろう。農村を題材にした作品は多くの場合、それにより人々にやる気が出て、農村に活気が戻ったことを描く。

責任田や副業で現金収入も増大し、万元戸も出現する。[①] 購買力がつくのに伴ない、物質的要求もそれに比例して増大する。また精神的文化的要求も高まる。[②] しかし、中国の農村は広大で、そこに息づく人々も莫大な数にのぼり、生